

V その他

感染症情報解析評価委員会「今週のトピックス」

2016年（平成28年）の感染症発生動向調査週報に掲載された、注目すべき感染症についてのコメントである「今週のトピックス」（感染症情報解析評価委員会が作成）を全て掲載した。

■ 2015年（平成27年）第53週～2016年（平成28年）第1週「インフルエンザ 流行期に入る」

第1週は前週比89.8%増の2,704例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、水痘、流行性耳下腺炎の順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ6.2、1.8、1.7、1.0、0.9であった。

感染性胃腸炎は前週比86%増の1,234例の報告で、中河内10.2、大阪市西部9.3、南河内9.1と続く。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は77%増の353例で、大阪市西部2.6、中河内2.5、大阪市南部2.4である。

RSウイルス感染症は35%増の349例で、大阪市西部2.7、中河内・大阪市北部2.6であった。

水痘は83%増の190例で、大阪市北部1.8、中河内1.7である。流行性耳下腺炎は245%増の183例で、大阪市北部2.2、南河内2.0であった。

インフルエンザは110%増の486例で、定点あたり1.6と流行開始の目安である1を超えた。大阪市西部を除く10ブロックで増加しており、今後の動向に注意が必要である。A（H3）亜型・A（H1）pdm09亜型が分離されている。

麻しん、風しんの報告はなかった。

■ 2016年（平成28年）第2週「インフルエンザ 流行続く」

第2週は前週比17.1%減の2,242例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、流行性耳下腺炎、伝染性紅斑の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ5.7、1.7、0.9、0.7、0.6であった。

感染性胃腸炎は前週比8%減の1,132例の報告で、南河内8.9、中河内7.8、泉州6.5と続く。A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は5%減の334例で、泉州2.7、南河内2.2である。

RSウイルス感染症は49%減の179例で、大阪市北部2.1、大阪市西部・南河内1.7であった。

インフルエンザは96%増の954例で、定点あたり3.1と全てのブロックで1を超えた。

マイコプラズマ肺炎は78%増の32例で、定点あたり1.9であった。報告数が増加しており、注意が必要である。

麻しんの報告はなく、風しんの報告は1例あった。

■ 2016年（平成28年）第3週「インフルエンザ さらに増加」

第3週は前週比12.6%増の2,525例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、伝染性紅斑、流行性耳下腺炎の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ6.8、2.4、0.9、0.6、0.5であった。

感染性胃腸炎は前週比20%増の1,358例の報告で、南河内11.0、中河内9.7、泉州7.9と続く。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は41%増の470例で、南河内3.8、泉州3.7、大阪市南部3.1である。

RSウイルス感染症は3%減の173例で、大阪市北部・南河内2.0、大阪市西部1.4であった。

インフルエンザは196%増の2,822例で、定点あたり9.2である。大阪市西部17.0、南河内12.6、中河内10.8であり、全ブロックで大きく増加した。

麻しん、風しんの報告はなかった。

■ 2016年(平成28年)第4週「インフルエンザ 注意報レベル超える」

第4週は前週比2.0%減の2,475例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性耳下腺炎、伝染性紅

斑、RSウイルス感染症の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ6.3、2.8、0.6、0.6、0.6であった。感染性胃腸炎は前週比8%減の1,256例の報告で、中河内10.9、南河内10.7と続く。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は20%増の564例で、泉州5.1、大阪市北部3.8である。

流行性耳下腺炎は34%増の129例で、大阪市北部1.4であった。

インフルエンザは121%増の6,223例で、定点あたり20.3である。大阪市西部29.3、南河内27.5、中河内23.2であり、全ブロックで注意報レベル基準値の10を超えた。優位な流行株はAH1pdm09であり、中枢神経系合併症の報告があった。

麻しんの報告はなく、風しんの報告は1例であった。

■ 2016年(平成28年)第5週「インフルエンザ 警報レベル超える」

第5週は前週比2.9%減の2,403例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性耳下腺炎、RSウイルス感染症、伝染性紅斑の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ6.3、2.8、0.8、0.6、0.4であった。

感染性胃腸炎は1,263例と前週から微増し、南河内10.7、中河内9.7、大阪市北部6.9と続く。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は563例と微減し、南河内・泉州4.9、大阪市南部4.4である。

流行性耳下腺炎は16%増の150例で、南河内1.8、大阪市南部1.4、泉州・大阪市北部1.1であった。

インフルエンザは56%増の9,714例で、定点あたり31.6である。南河内46.4、大阪市西部43.2、大阪市北部36.9と続き、7ブロックで警報レベル開始基準値の30を超えた。

麻しんの報告はなく、風しんの報告は1例であった。

■ 2016年(平成28年)第6週「インフルエンザ 流行拡大」

第6週は前週比7.4%減の2,226例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性耳下腺炎、水痘、伝染性紅斑の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ5.7、2.8、0.6、0.4、0.4であった。

感染性胃腸炎は前週比10%減の1,138例で、南河内11.2、中河内9.9、大阪市西部6.0と続く。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は1%減の557例で、大阪市北部5.1、大阪市南部5.0である。

流行性耳下腺炎は14%減の129例で、南河内2.3、泉州1.0であった。

インフルエンザは30%増の12,668例で、定点あたり41.3である。大阪市西部62.1、大阪市北部57.5、南河内56.5と続き、10ブロックで警報レベル開始基準値の30を超えた。今シーズンのインフルエンザウイルスの検出状況は、B型、AH1pdm09、AH3亜型の順である。

麻しん、風しんの報告はなかった。

■ 2016年（平成28年）第7週「インフルエンザ 警報レベル続く」

第7週は前週比0.1%増の2,229例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性耳下腺炎、水痘、伝染性紅斑の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ6.0、2.4、0.8、0.4、0.4である。

感染性胃腸炎は前週比6%増の1,208例の報告で、中河内11.8、南河内10.8、大阪市北部7.6の順であった。A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は14%減の481例で、大阪市南部4.2、大阪市北部4.1、泉州3.1と続く。流行性耳下腺炎は22%増の158例で、大阪市北部1.9、泉州1.4、南河内1.3、中河内1.1と高い。水痘は4%減の85例、伝染性紅斑は同数の79例であった。

インフルエンザは4%減の12,157例、定点あたり39.6である。南河内59.5、大阪市西部54.4と依然高い。麻しん、風しんの報告はなかった。

■ 2016年（平成28年）第8週「インフルエンザ 流行続くも減少傾向」

第8週は前週比0.4%増の2,237例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性耳下腺炎、伝染性紅斑、突発性発しんの順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ6.4、2.3、0.8、0.4、0.4であった。

感染性胃腸炎は前週比6%増の1,275例で、南河内12.8、中河内11.8、三島6.4、北河内6.0と続く。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は5%減の456例で、南河内4.4、大阪市南部3.5、中河内2.8、泉州2.7である。

流行性耳下腺炎は2%増の161例で、南河内2.6、大阪市北部1.4、泉州1.0であった。伝染性紅斑は8%増の85例で中河内・南河内1.0であった。

インフルエンザは1.2%減の12,011例で、定点あたり39.1である。南河内61.0、堺市46.0、大阪市西部44.9、中河内42.6、泉州42.4と依然高い状態が続いている。

麻しん、風しんの報告はなかった。

■ 2016年（平成28年）第9週「インフルエンザ ピーク越え」

第9週は前週比4.6%増の2,345例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性耳下腺炎、水痘、伝染性紅斑の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ7.0、2.3、0.7、0.4、0.4である。

感染性胃腸炎は前週比10%増の1,409例の報告で、大阪市西部13.8、南河内11.6、中河内10.2の順であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は1%減の452例で、南河内3.9である。

流行性耳下腺炎は11%減の145例で、大阪市北部1.5、泉州1.4、南河内1.2、北河内0.9と高い。水痘は29%増の82例で泉州0.8、三島0.7であった。

インフルエンザは6.2%減の11,306例、定点あたり36.8となり、3週連続して減少した。南河内57.1、大阪市西部46.5、泉州41.3、北河内41.1、堺市39.0と依然高いが、3ブロックを除き、前週に比し減少している。

麻しんの報告はなく、風しんは1例の報告であった。

■ 2016年(平成28年)第10週「インフルエンザ 減少」

第10週は前週比7.5%増の2,520例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性耳下腺炎、突発性発しん、水痘の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ7.8、2.3、1.0、0.4、0.3である。

感染性胃腸炎は前週比10%増の1,553例で、中河内13.2、南河内12.9、泉州・北河内9.3であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は1%増の457例で、南河内4.1、大阪市西部3.3、中河内3.2と続く。

流行性耳下腺炎は32%増の191例、南河内2.1、泉州1.8、大阪市北部1.2である。水痘は26%減の61例、中河内・大阪市北部・泉州0.5であった。

インフルエンザは30%減の7,969例、定点あたり26.0で、全ブロックで減少した。南河内36.8、大阪市西部29.7、北河内29.3である。

麻しんの報告はなく、風しんの報告は1例であった。

■ 2016年(平成28年)第11週「インフルエンザ さらに減少」

第11週は前週比5.6%減の2,380例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性耳下腺炎、突発性発しん、伝染性紅斑の順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ7.6、2.0、0.7、0.3、0.3であった。

感染性胃腸炎は前週比2%減の1,516例の報告で、南河内13.7、中河内11.7、北河内8.8である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は11%減の409例で、南河内3.8、大阪市西部3.7と続く。

流行性耳下腺炎は22%減の149例で、南河内2.6と目立つ。

伝染性紅斑は21%増の63例で、南河内0.9であった。

インフルエンザは36%減の5,105例で、定点あたり16.6である。5週連続で減少した。南河内27.2、大阪市西部21.9、泉州19.3と続く。

麻しんの報告はなく、風しんの報告は1例であった。

■ 2016年(平成28年)第12週「インフルエンザ 減少続く」

第12週は前週比14.5%減の2,034例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性耳下腺炎、突発性発しん、水痘の順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ6.1、1.8、0.8、0.4、0.4であった。

感染性胃腸炎は前週比19%減の1,229例の報告があり、南河内11.3、中河内8.3、北河内7.3である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は12%減の358例、南河内3.5、大阪市西部2.8、豊能2.3と続く。

流行性耳下腺炎は13%増の169例、南河内・大阪市北部1.8、泉州1.4であった。水痘は42%増の71例である。

インフルエンザは40%減の3,062例、定点あたり10.0で、全ブロックで減少した。大阪市西部17.9、南河内12.5、大阪市北部11.7など5ブロックで警報継続基準値の10を超えている。

麻しんの報告はなく、風しんは1例の報告であった。

■ 2016年（平成28年）第13週「感染性胃腸炎 増加」

第13週は前週比16.8%増の2,375例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性耳下腺炎、突発性発しん、水痘の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ8.1、1.5、0.9、0.4、0.3であった。

感染性胃腸炎は前週比32%増の1,618例で、南河内14.4、中河内12.0、泉州11.1、北河内10.6と続く。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は16%減の301例で、南河内2.7、大阪市南部2.4、豊能2.1、泉州1.8、中河内1.7である。

流行性耳下腺炎は2%増の173例で、南河内3.0と目立ち、泉州1.7、大阪市北部1.5、中河内0.8、大阪市西部0.7と続く。

インフルエンザは28%減の2,216例で、定点あたり7.2で大阪市西部、南河内共に10.1であり、9ブロックで警報終息基準値の10を下回った。

麻しん、風しんの報告はなかった。

■ 2016年（平成28年）第14週「インフルエンザ 終息へ」

第14週は前週比8.1%減の2,182例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性耳下腺炎、突発性発しん、水痘の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ7.1、1.6、0.8、0.4、0.3であった。

感染性胃腸炎は前週比12%減の1,427例で、南河内12.4、中河内11.2、泉州11.0、北河内6.7と続く。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は4%増の313例で、南河内3.5、北河内1.9、大阪市南部・泉州・中河内ともに1.8である。

流行性耳下腺炎は8%減の160例で、南河内2.6と目立ち、大阪市北部1.3、中河内1.2、大阪市南部1.0、泉州0.9と続く。

インフルエンザは40%減の1,333例、定点あたり4.3で、全ブロックで警報レベル終息基準値の10を下回った。

麻しん、風しんの報告はなかった。

■ 2016年（平成28年）第15週「A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 増加」

第15週は前週比13.5%増の2,476例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性耳下腺炎、突発性発しん、水痘の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ7.9、1.8、0.9、0.5、0.3であった。

感染性胃腸炎は前週比11%増の1,589例で、中河内13.1、泉州11.2、南河内10.8、北河内10.4と続く。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は17%増の367例で、泉州2.8、中河内2.6、南河内2.4、大阪市西部2.1、北河内1.9である。

流行性耳下腺炎は15%増の184例で、南河内2.0と高い。泉州1.9、中河内・大阪市北部ともに1.3、三島1.0と続く。

インフルエンザは54%減の607例、定点あたり2.0となった。

麻しんの報告はなく、風しんの報告が1例あった。

■ 2016年(平成28年)第16週「感染性胃腸炎 増加」

第16週は前週比10.1%増の2,725例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性耳下腺炎、突発性発しん、水痘の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ8.8、2.3、0.8、0.5、0.4である。

感染性胃腸炎は前週比10%増の1,745例で、中河内14.4、泉州12.9、南河内11.5の順であった。ノロウイルス以外では、A群ロタウイルスが主に検出されている。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は26%増の463例で、南河内3.9、大阪市南部3.3、大阪市西部2.8である。流行性耳下腺炎は9%減の167例で、大阪市北部・南河内1.7、泉州1.5であった。水痘は18%増の78例である。

インフルエンザは18%減の496例、定点あたり1.6となった。

麻しん・風しんの報告はなかった。

■ 2016年(平成28年)第17週・第18週「インフルエンザ 終息か」

第17週と第18週をあわせて報告する。黄金週間による診療実日数・機関の減少を考慮する必要がある。

第17週は前週比4.7%減の2,596例の報告があった。第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性耳下腺炎、突発性発しん、咽頭結膜熱の順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ8.2、2.1、0.9、0.5、0.5であった。インフルエンザは56%減の266例で、定点あたり0.9である。

第18週は前週比21%減の2,039例の報告があった。第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性耳下腺炎、咽頭結膜熱、水痘の順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ5.4、1.8、1.0、0.5、0.5であった。

感染性胃腸炎は前週比34%減の1,075例で、中河内10.9である。

流行性耳下腺炎は17%増の204例で、大阪市北部3.1と高い。

インフルエンザは61%減の104例、定点あたり0.3で、大阪市西部1.0を除き10ブロックで1未満となった。

麻しん、風しんの報告はなかった。

■ 2016年(平成28年)第19週「A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 増加」

第19週は前週比32.8%増の2,707例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性耳下腺炎、咽頭結膜熱、水痘の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ7.2、2.6、1.1、0.7、0.7であった。

感染性胃腸炎は前週比33%増の1,426例で、中河内13.0、南河内12.8、泉州10.1と続く。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は45%増の524例で、南河内3.7、豊能3.6、中河内3.2、大阪市北部3.1、泉州3.0で高い。

流行性耳下腺炎は9%増の223例で、南河内2.6、大阪市北部2.1であった。

咽頭結膜熱は43%増の142例で、中河内2.1である。水痘は47%増の137例で、中河内1.6、南河内1.0であった。

インフルエンザは51%減の51例で、全ブロックで1.0を下回り、終息したと考えられる。

麻しんの報告はなく、風しんの報告が1例あった。

■ 2016年（平成28年）第20週「A群溶血性レンサ球菌咽頭炎増加続く」

第20週は前週比9.9%増の2,975例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性耳下腺炎、咽頭結膜熱、突発性発しんの順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ7.8、3.2、1.2、0.7、0.6であった。

感染性胃腸炎は前週比9%増の1,559例で、南河内12.8、中河内10.8、北河内10.3と続く。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は20%増の631例で、南河内4.8、中河内4.6、大阪市西部4.4、泉州3.9で高い。流行性耳下腺炎は10%増の245例で、大阪市北部3.2、泉州2.1であった。咽頭結膜熱は0.7%増の143例で、中河内1.4、大阪市南部1.1である。

上位5疾患以外は第6位のヘルパンギーナが170%増の73例で、堺市1.4であった。

麻しん、風しんの報告はなかった。

■ 2016年（平成28年）第21週「流行性耳下腺炎 増加」

第21週は前週比6.5%増の3,169例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性耳下腺炎、咽頭結膜熱、突発性発しんの順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ8.1、3.2、1.3、0.9、0.7である。

感染性胃腸炎は前週比3%増の1,611例で、中河内14.0、南河内13.1、北河内11.5と続く。A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は0.6%増の635例で、中河内4.4、大阪市北部4.1、泉州4.0である。

流行性耳下腺炎は4%増の255例、大阪市北部2.6、南河内2.2、泉州1.8、北河内1.5であった。5週連続で増加している。

咽頭結膜熱は22%増の174例、中河内2.4、北河内1.5である。

麻しん、風しんの報告はなかった。

■ 2016年（平成28年）第22週「流行性耳下腺炎 さらに増加」

第22週は前週比7.2%減の2,941例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性耳下腺炎、咽頭結膜熱、ヘルパンギーナの順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ6.7、3.0、1.6、0.9、0.9であった。

感染性胃腸炎は前週比17%減の1,334例で、中河内11.9、南河内11.8、泉州・北河内8.6と続く。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は6%減の594例で、南河内5.1、中河内4.5、大阪市北部3.6である。

流行性耳下腺炎は22%増の310例、大阪市北部3.4と注意報開始基準値の3を超え、泉州2.8、南河内2.3と続く。6週連続で増加しており、今後の発生動向に注意が必要である。

咽頭結膜熱は6%増の185例で、中河内2.7、ヘルパンギーナは134%増の180例で、泉州3.0であった。

麻しん、風しんの報告はなかった。

■ 2016年（平成28年）第23週「ヘルパンギーナ増加」

第23週は前週比6.9%増の3,144例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、流行性耳下腺炎、咽頭結膜熱の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ7.5、3.1、1.4、1.2、1.0であった。

感染性胃腸炎は前週比12%増の1,496例で、南河内・中河内ともに12.1、北河内10.2、泉州8.5、大阪市西部6.7と続く。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は4%増の616例で、中河内5.1、泉州4.3、大阪市北部3.9、南河内3.6、北河内3.4である。

ヘルパンギーナは54%増の278例と大きく増加し、泉州4.8、大阪市北部3.5、堺市1.8、南河内1.1、中河内0.8と続く。

流行性耳下腺炎は23%減の240例で、南河内3.3、咽頭結膜熱は2%増の189例で、中河内2.6であった。

麻疹、風しんの報告はなかった。

■ 2016年（平成28年）第24週「ヘルパンギーナさらに増加」

第24週は前週比6.0%増の3,334例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、流行性耳下腺炎、咽頭結膜熱の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ7.1、3.0、2.3、1.5、0.8であった。

感染性胃腸炎は前週比5%減の1,414例で、南河内12.8、中河内11.8、北河内10.8と続く。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は1%減の609例で、中河内5.4、豊能4.0、南河内3.4である。

ヘルパンギーナは66%増の461例と6週連続で増加し、大阪市北部5.5、泉州5.0、堺市2.5、南河内2.2と高い。

流行性耳下腺炎は29%増の309例で、南河内・泉州2.9、大阪市北部2.6である。咽頭結膜熱は12%減の167例で、北河内2.3であった。

麻疹の報告はなく、風しんの報告が1例あった。

■ 2016年（平成28年）第25週「ヘルパンギーナ増加続く」

第25週は前週並みの3,344例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、ヘルパンギーナ、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性耳下腺炎、咽頭結膜熱の順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ6.2、3.5、2.7、1.7、0.9であった。

感染性胃腸炎は前週比12%減の1,249例の報告があり、中河内9.7、北河内9.6、南河内8.2である。

ヘルパンギーナは51%増の695例で、大阪市北部6.1、南河内6.0、泉州4.5と続き、2ブロックは警報開始レベルの6以上となった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は12%減の538例で、中河内4.5、大阪市南部3.5、北河内・大阪市北部3.3である。

流行性耳下腺炎は12%増の345例で、南河内3.3、泉州3.1で注意報レベル基準値の3を上回った。咽頭結膜熱は4%増の173例で、中河内2.5である。

麻疹、風しんの報告はなかった。

■ 2016年（平成28年）第26週「ヘルパンギーナ さらに増加」

第26週は前週比2.3%増の3,420例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、ヘルパンギーナ、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性耳下腺炎、咽頭結膜熱の順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ5.7、4.7、2.7、1.6、0.6であった。

感染性胃腸炎は前週比9%減の1,139例の報告で、中河内9.9、南河内8.6、北河内7.5である。

ヘルパンギーナは36%増の948例で、南河内7.2、大阪市北部6.9、北河内6.1と、3ブロックで警報レベル開始基準値6を超えていた。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は、2%増の548例で、中河内4.6、大阪市北部3.9である。

流行性耳下腺炎は5%減の329例で、南河内3.4、咽頭結膜熱は27%減の127例で、中河内1.3であった。

麻疹、風しんの報告はなかった。

■ 2016年（平成28年）第27週「ヘルパンギーナ 第1位に」

第27週は前週比1.2%増の3,461例の報告があった。報告の第1位はヘルパンギーナで以下、感染性胃腸炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性耳下腺炎、突発性発しんの順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ5.8、4.9、2.6、1.8、0.5であった。

ヘルパンギーナは22%増の1,161例で、北河内9.5、南河内8.6、中河内7.3、大阪市北部6.4と、4ブロックで警報レベル開始基準値6を超えた。

感染性胃腸炎は前週比13%減の994例の報告で、中河内8.2、泉州7.1、北河内7.0である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は、3%減の530例で、中河内4.9、豊能3.5である。

流行性耳下腺炎は8%増の355例で、南河内4.6、中河内3.1であった。

マイコプラズマ肺炎の報告数は3週連続で増加し、1を超えた。

麻疹、風しんの報告はなかった。

■ 2016年（平成28年）第28週「流行性耳下腺炎 増加」

第28週は前週比0.9%増の3,493例の報告があった。第1位はヘルパンギーナで以下、感染性胃腸炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性耳下腺炎、突発性発しんの順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ5.9、4.5、2.4、2.2、0.5であった。

ヘルパンギーナは前週比2%増の1,187例で、北河内10.4、大阪市北部8.5、豊能6.7、中河内6.5、南河内6.3と、5ブロックで警報レベル開始基準値6を超えた。

感染性胃腸炎は9%減の901例の報告で、中河内8.2、南河内6.3、泉州6.2である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は、9%減の480例で、中河内4.7、大阪市南部4.1、南河内4.0である。

流行性耳下腺炎は23%増の436例であった。南河内6.2と警報レベル開始基準値6を超え、大阪市北部3.8、中河内3.4と続く。マイコプラズマ肺炎の報告数は4週連続で増加している。

麻疹、風しんの報告はなかった。

■ 2016年（平成28年）第29週「ヘルパンギーナ 減少」

第29週は前週比21.1%減の2,755例の報告があった。報告の第1位はヘルパンギーナで以下、感染性胃腸炎、流行性耳下腺炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発しんの順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ4.1、3.7、2.0、1.7、0.5である。

ヘルパンギーナは前週比30%減の831例、北河内7.5、大阪市北部6.1、中河内5.7、大阪市西部4.7であった。感染性胃腸炎は17%減の747例、中河内6.3、南河内5.6、北河内5.4である。

流行性耳下腺炎は8%減の401例で、大阪市北部4.1、南河内3.2、泉州2.7であった。依然流行が続いている。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は28%減の344例で、中河内3.2、南河内2.6、大阪市南部2.0の順である。麻疹、風しんの報告はなかった。

■ 2016年（平成28年）第30週「流行性耳下腺炎 増加」

第30週は前週比0.5%減の2,742例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、ヘルパンギーナ、流行性耳下腺炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発しんの順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ4.2、3.1、2.2、1.7、0.6であった。

感染性胃腸炎は前週比14%増の854例の報告で、中河内7.3、南河内6.4、大阪市北部5.2である。

ヘルパンギーナは24%減の630例で、北河内5.4、中河内5.2であった。

流行性耳下腺炎は11%増の445例である。大阪市北部3.9、泉州3.8、中河内3.6と3ブロックで注意報基準値3を超えている。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は、同数の344例で、中河内3.3、南河内2.6であった。

マイコプラズマ肺炎は4週連続で報告数20例を超えている。

麻疹、風しんの報告はなかった。

■ 2016年（平成28年）第31週「流行性耳下腺炎 流行続く」

第31週は前週比12.8%減の2,391例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、ヘルパンギーナ、流行性耳下腺炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発しんの順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ3.7、2.1、2.0、1.6、0.6であった。

感染性胃腸炎は前週比12%減の752例で、南河内7.8、中河内5.5、北河内5.0、大阪市北部4.2と続く。

ヘルパンギーナは34%減の418例で、中河内3.9、北河内3.4、南河内2.5の順であった。

流行性耳下腺炎は11%減の394例で、中河内4.0、南河内3.8、大阪市北部3.6と3ブロックで注意報開始基準値の3を超えている。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は8%減の317例で、中河内2.8、南河内2.2、豊能・北河内1.7であった。

麻疹、風しんの報告はなかった。

■ 2016年（平成28年）第32週「ヘルパンギーナ 減少続く」

第32週は前週比26.5%減の1,757例の報告があった。報告の解釈には祝日（山の日）や盆休による診療実日数と診療機関の減少を考慮する必要がある。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、流行性耳下腺炎、ヘルパンギーナ、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、咽頭結膜熱の順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ2.8、1.8、1.2、1.0、0.5であった。

感染性胃腸炎は前週比26%減の555例で、中河内5.1、南河内4.9、泉州4.0、大阪市西部3.1と続く。

流行性耳下腺炎は10%減の356例で、大阪市北部5.5、中河内3.1、南河内2.9と2ブロックで注意報開始基準値の3を超えていた。

ヘルパンギーナは42%減の244例で、大阪市西部2.3、北河内2.0、中河内1.9の順である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は34%減の209例で、豊能・南河内・北河内1.5、中河内1.4であった。

麻しん、風しんの報告はなかった。

■ 2016年（平成28年）第33週「RSウイルス感染症 増加の兆し」

第33週は前週比1.8%増の1,788例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、流行性耳下腺炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、RSウイルス感染症の順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ3.0、1.9、0.9、0.8、0.7であった。

感染性胃腸炎は前週比10%増の612例で、中河内5.8、南河内5.1、大阪市北部4.1と続く。

流行性耳下腺炎は7%増の382例で、中河内4.0、大阪市北部3.8、泉州3.1であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は12%減の184例で、中河内1.8、豊能1.4であった。

ヘルパンギーナは36%減の156例で、大阪市西部1.7、中河内・北河内1.1の順である。

RSウイルス感染症は86%増の132例で、大阪市北部2.5、大阪市西部1.5であった。今後の動向に注意が必要である。

マイコプラズマ肺炎の報告が増加している。

麻しんの報告は1例（輸入例疑い）、風しんの報告はなかった。

■ 2016年（平成28年）第34週「麻しん 集団発生」

第34週は前週比11.7%増の1,997例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、流行性耳下腺炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、RSウイルス感染症の順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ3.9、1.8、1.2、0.7、0.6であった。

感染性胃腸炎は前週比27%増の780例で、中河内6.6、南河内6.1、北河内・泉州4.8と続く。

流行性耳下腺炎は6%減の360例で、大阪市北部4.1、南河内2.7、中河内2.5であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は30%増の239例で、中河内2.2、南河内2.0、豊能1.5であった。

ヘルパンギーナは5%減の148例で、大阪市北部・北河内・中河内・泉州1.0である。

RSウイルス感染症は15%減の112例で、大阪市北部1.2、同東部1.0であった。

麻しんは8月17日から31日まで集団発生を含む18例の報告があり、流行拡大が懸念される。風しんの報告はなかった。

■ 2016年（平成28年）第35週「麻しん 流行拡大」

第35週は前週比4.9%増の2,095例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、流行性耳下腺炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、ヘルパンギーナの順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ4.0、1.6、1.3、0.9、0.7であった。

感染性胃腸炎は前週比3%増の806例で、中河内6.6、南河内6.0と続く。流行性耳下腺炎は11%減の319例で、中河内3.2、大阪市北部2.5、南河内2.0であった。A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は9%増の260例で、中河内2.3である。

RSウイルス感染症は70%増の190例で大阪市北部2.5、豊能1.5、南河内1.4であった。

麻しんは、8月17日から9月7日まで集団発生を含む36例の報告があり、今後は感染の拡大に注意が必要である。風しんの報告は1件であった。

■ 2016年(平成28年)第36週「麻しん さらに感染拡大」

第36週は前週比5.6%増の2,213例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、流行性耳下腺炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、突発性発しんの順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ3.9、1.6、1.5、1.2、0.6であった。

感染性胃腸炎は前週比4%減の776例で、中河内6.6、南河内5.8と続く。
流行性耳下腺炎は3%増の330例で、泉州2.9、大阪市北部2.5、南河内2.3であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は20%増の311例で、中河内3.0である。
RSウイルス感染症は25%増の237例で大阪市北部3.1、豊能2.1、南河内1.8であった。

流行性角結膜炎は15%増の61例で、大阪市西部9.5、中河内3.6と続く。

麻しんは、8月17日から9月14日まで集団発生を含む42例の報告があった。風しんの報告はなかった。

■ 2016年(平成28年)第37週「RSウイルス感染症 増加」

第37週は前週比5.3%減の2,095例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性耳下腺炎、RSウイルス感染症、咽頭結膜熱の順であった。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ3.4、1.9、1.5、1.2、0.5であった。

感染性胃腸炎は前週比13%減の678例で、南河内6.1、泉州・中河内4.3と続く。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は23%増の384例で、南河内3.3、中河内3.1である。

流行性耳下腺炎は8%減の303例で、北河内2.3、泉州・大阪市北部2.1であった。

RSウイルス感染症は5%増の248例で、南河内2.9、豊能2.5、大阪市北部2.3であった。

流行性角結膜炎は3%増の63例で、大阪市西部が11.5と目立つ。

麻しんの報告は6例、風しんの報告はなかった。

■ 2016年(平成28年)第38週「流行性耳下腺炎 増加」

第38週は前週比7.2%減の1,945例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、流行性耳下腺炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、手足口病の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ2.9、1.7、1.6、1.3、0.4である。

感染性胃腸炎は前週比13%減の589例、中河内5.5、大阪市西部4.0、南河内3.8であった。

流行性耳下腺炎は11%増の337例、中河内2.9、大阪市北部2.7、泉州2.5と高い。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は17%減の319例、南河内4.2、大阪市南部2.4、中河内2.0の順であった。

RSウイルス感染症は2%増の253例、南河内2.3、大阪市北部2.2であった。

手足口病は36%増の87例、中河内1.3であった。

麻しんの報告は3例で、風しんの報告はなかった。

■ 2016年(平成28年)第39週「流行性耳下腺炎 さらに増加」

第39週は前週比21.8%増の2,369例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、流行性耳下腺炎、RSウイルス感染症、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、手足口病の順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ3.6、2.1、1.7、1.6、0.6であった。

感染性胃腸炎は前週比23%増の726例で、中河内6.1、南河内5.8である。

流行性耳下腺炎は24%増の418例、南河内3.4、泉州3.3と2ブロックで注意報開始基準値の3を超えていた。

RSウイルス感染症は38%増の349例、5週連続で増加しており、南河内3.6、中河内3.0、大阪市北部2.6と続く。A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は1%減の317例で、中河内・大阪市西部2.7であった。

手足口病は40%増の122例で、中河内1.4、三島・大阪市西部1.0である。

麻しんの報告は国内感染疑い1例で、遺伝子型D8であった。風しんの報告はなかった。

■ 2016年（平成28年）第40週「RSウイルス感染症 増加」

第40週は前週比8.3%増の2,566例の報告があった。第1位は感染性胃腸炎で以下、RSウイルス感染症、流行性耳下腺炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、手足口病の順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ3.5、2.8、1.9、1.4、1.2であった。

感染性胃腸炎は前週比2%減の708例で、南河内6.1、中河内5.1と続く。

RSウイルス感染症は60%増の559例で、中河内4.8、南河内4.6、大阪市北部4.2の順であった。第34週以降6週連続で増加しており、例年の同時期に比較してかなり多く、今後の発生動向に注意が必要である。

流行性耳下腺炎は7%減の387例で泉州・大阪市北部3.1と2ブロックで注意報開始基準値の3を超えている。

Vmg A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は9%減の287例で、南河内2.8、中河内2.3である。手足口病は91%増加し233例、大阪市北部3.2、中河内2.8であった。

麻しんの報告は1例、風しんの報告はなかった

■ 2016年（平成28年）第41週「RSウイルス感染症 流行続く」

第41週は前週比9.9%減の2,313例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、RSウイルス感染症、流行性耳下腺炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、手足口病の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ3.5、2.8、1.8、1.2、0.8であった。

感染性胃腸炎は前週比0.1%減の707例で、中河内7.2、北河内4.9、南河内4.5と続く。

RSウイルス感染症は1%減の553例で南河内4.6、北河内4.2、大阪市北部4.1であった。前週よりわずかに減少しているが、流行が続いている。

流行性耳下腺炎は8%減の357例で、南河内3.8、泉州2.5、大阪市西部2.0と続く。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は19%減の232例で、中河内1.9、北河内1.6である。

手足口病は35%減の152例で、大阪市西部2.1、大阪市北部1.6であった。

麻しん、風しんの報告はなかった。

■ 2016年（平成28年）第42週「流行性耳下腺炎 再び増加」

第42週は前週比17.9%増の2,726例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、RSウイルス感染症、流行性耳下腺炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、手足口病の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ4.3、2.9、2.6、1.6、0.7であった。

感染性胃腸炎は前週比21%増の856例で、南河内7.1、中河内6.9、北河内5.7と続く。

RSウイルス感染症は5%増の579例で、南河内5.1、北河内4.1、大阪市西部3.7であった。

流行性耳下腺炎は44%増の513例で、過去10年間で最も多く、泉州4.7、南河内4.0、北河内3.0と続く。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は37%増の317例で、南河内2.8、中河内2.4である。

流行性角結膜炎は19%増の57例の報告があった。大阪市西部8.5で警報レベル開始基準値8を超えている。

流行中のマイコプラズマ肺炎はさらに増加し、51例の報告があった。

麻しん、風しんの報告はなかった。

■ 2016年（平成28年）第43週「感染性胃腸炎 増加」

第43週は前週比7.4%減の2,524例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、RSウイルス感染症、流行性耳下腺炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、手足口病の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ5.1、2.2、1.8、1.6、0.5であった。

感染性胃腸炎は前週比18%増の1,011例で、中河内9.4、南河内7.3、大阪市南部6.2、大阪市北部5.9と続く。

RSウイルス感染症は前週比25%減の434例で、南河内4.8、大阪市北部2.8、中河内2.7である。流行性耳下腺炎は29%減の365例で、南河内3.1、泉州2.7、北河内2.5と続く。A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は1例増の318例で、南河内2.4、大阪市南部・豊能2.3、北河内・泉州2.0である。

マイコプラズマ肺炎は14%減の44例で、定点あたり2.6である。

麻疹、風しんの報告はなかった。

■ 2016年（平成28年）第44週「感染性胃腸炎 増加続く」

第44週は前週比12.5%増の2,839例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、RSウイルス感染症、流行性耳下腺炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、手足口病の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ6.6、1.9、1.7、1.7、0.6であった。

感染性胃腸炎は前週比31%増の1,325例で、中河内11.6、南河内11.0、大阪市西部8.5、大阪市南部7.4と続く。

RSウイルス感染症は前週比11%減の386例で、南河内3.6、北河内2.5、大阪市北部2.4である。

流行性耳下腺炎は5%減の346例で、南河内2.8、泉州2.6、大阪市西部2.3と続く。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は5%増の333例で、大阪市南部2.6、北河内2.5、南河内2.2である。

マイコプラズマ肺炎は36%減の28例で、定点あたり1.6である。

麻疹、風しんの報告はなかった。

■ 2016年（平成28年）第45週「感染性胃腸炎 さらに増加」

第45週は前週比24.3%増の3,528例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性耳下腺炎、RSウイルス感染症、突発性発しんの順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ9.5、2.2、2.0、1.9、0.5であった。

感染性胃腸炎は前週比44%増の1,912例で、南河内16.1、中河内12.5、北河内11.7、大阪市西部11.3と続く。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は35%増の448例で南河内3.5、豊能3.0、大阪市南部2.9であった。

流行性耳下腺炎は14%増の395例で、泉州4.0、南河内2.8、北河内2.4と続く。

RSウイルス感染症は1%減の384例で、北河内3.2、南河内3.0、大阪市北部2.4である。

インフルエンザは86%増の158例で、定点あたり0.5であるが、増加傾向となっている。

麻疹、風しんの報告はなかった。

■ 2016年（平成28年）第46週「インフルエンザ 流行迫る」

第46週は前週比18.2%増の4,171例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性耳下腺炎、RSウイルス感染症、手足口病の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ13.3、2.0、1.7、1.6、0.5である。

感染性胃腸炎は前週比40%増の2,671例であった。中河内21.4、北河内20.7と警報レベル開始基準値20を超え、南河内18.1、大阪市西部15.5と続く。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は10%減の401例で南河内3.3、大阪市西部3.1である。流行性耳下腺炎は16%減の332例で、泉州3.1、北河内2.8、南河内2.0であった。

RSウイルス感染症は14%減の331例、手足口病は44%増の108例である。

インフルエンザは70%増の268例で、定点あたり0.9となった。大阪市西部2.2、大阪市南部1.4、中河内1.3、南河内1.2と4ブロックで流行開始の目安である1を超えた。学級閉鎖も増え、今後の動向に注意が必要である。

麻しん、風しんの報告はなかった。

■ 2016年（平成28年）第47週「インフルエンザ 流行期に入る」

第47週は前週比0.5%増の4,192例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、流行性耳下腺炎、水痘の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ12.9、2.0、1.9、1.7、0.6である。

感染性胃腸炎は前週比3%減の2,587例であった。中河内18.0、南河内16.1、北河内15.7の順である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は2%減の393例で、南河内4.1、北河内2.9、大阪市西部2.6であった。

RSウイルス感染症は16%増の383例で、北河内3.5、大阪市西部3.4、南河内2.9である。

流行性耳下腺炎は5%増の350例で、北河内3.3、泉州3.1であった。

インフルエンザは50%増の402例で、定点あたり1.3となり流行期に入った。中河内2.9、大阪市西部2.2、南河内1.8、堺市1.4、大阪市南部1.2、北河内1.1で流行開始の目安である1を超えた。今後の動向に注意が必要である。

麻しん、風しんの報告はなかった。

■ 2016年（平成28年）第48週「感染性胃腸炎 増加」

第48週は前週比22.7%増の5,145例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性耳下腺炎、RSウイルス感染症、咽頭結膜熱の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ17.7、2.1、1.8、1.7、0.7である。

感染性胃腸炎は37%増の3,552例で、中河内24.7、南河内24.2、北河内23.7であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は10%増の432例で、南河内6.3、中河内3.2、北河内2.7の順である。

流行性耳下腺炎は5%増の366例で、泉州3.8であった。RSウイルス感染症は13%減の334例で、北河内3.0、大阪市西部2.9である。

咽頭結膜熱は20%増の131例であった。

インフルエンザは27%増の511例で、定点あたり1.7となった。中河内3.2、大阪市西部3.0である。

麻しんの報告はなく、風しんの報告は1例であった。

■ 2016年（平成28年）第49週「感染性胃腸炎 警報レベルに迫る」

第49週は前週比5.8%増の5,441例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、流行性耳下腺炎、咽頭結膜熱の順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ19.5、2.4、1.5、1.4、0.7であった。

感染性胃腸炎は前週比11%増の3,927例で、南河内34.8、中河内27.8、北河内23.1、泉州22.7、大阪市北部20.8と5ブロックで警報開始基準値20を超えていた。保育施設や小学校でノロウイルスによる集団感染事例も多発しており、感染予防対策が必要である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は13%増の490例で、南河内6.1、北河内3.6である。RSウイルス感染症は9%減の303例、流行性耳下腺炎は22%減の284例であった。

インフルエンザは24%増の633例で、定点あたり2.0である。大阪市西部5.1、中河内3.0、三島2.5と続く。麻しんの報告はなく、風しんの報告は1例あった。

■ 2016年（平成28年）第50週「感染性胃腸炎 警報レベル超える」

第50週は前週比7.4%増の5,845例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性耳下腺炎、RSウイルス感染症、咽頭結膜熱の順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ21.2、2.5、1.6、1.3、0.8であった。

感染性胃腸炎は前週比9%増の4,271例で、南河内36.8を筆頭に、中河内28.5、北河内27.4、泉州25.9、大阪市北部20.9と5ブロックで警報レベル開始基準値20を超えている。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は1%増の497例で、南河内6.3、中河内4.0であった。

流行性耳下腺炎は11%増の316例で、北河内2.9、南河内・泉州2.5であった。

インフルエンザは37%増の867例で、定点あたり2.8である。大阪市西部6.1、大阪市東部3.5、大阪市北部3.4と続く。

麻しんの報告は渡航歴のある1例があった。風しんの報告はなかった。

■ 2016年（平成28年）第51週「感染性胃腸炎 ピーク越えか」

第51週は前週比20.5%減の4,646例の報告があった。祝日による診療実日数の減少を考慮する必要がある。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、流行性耳下腺炎、咽頭結膜熱の順である。上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ、16.2、2.1、1.2、1.2、0.7であった。

感染性胃腸炎は前週比24%減の3,256例で、南河内26.2、中河内22.6、北河内20.6と4週連続で警報開始基準値20を超えている。しかし、大阪市西部を除き、10ブロックで減少し、祝日による診療実日数の減少を考慮しても、ピークを越えた可能性がある。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は17%減の414例、RSウイルス感染症は7%減の251例、流行性耳下腺炎は24%減の239例の報告があった。

インフルエンザは77%増の1,532例で、定点あたり5.0である。大阪市西部11.4、大阪市北部7.7、北河内6.8、大阪市東部6.7である。51週において初めて、大阪府内の全11ブロックで増加し、今後の発生動向に注意が必要である。

麻しん、風しんの報告はなかった。

■ 2016年（平成28年）第52週「インフルエンザ 増加」

2016年第52週と2017年第1週をあわせて報告する。ともに年末年始休暇による診療実日数の減少を考慮する必要がある。

第52週は前週比46%減の2,511例の報告があった。報告の第1位は感染性胃腸炎で以下、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、流行性耳下腺炎、水痘の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ、7.6、1.3、1.0、0.9、0.5である。

第1週は37%減の1,594例の報告があった。第1位は感染性胃腸炎で以下、流行性耳下腺炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症、水痘の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ3.8、1.2、0.8、0.8、0.6であった。

流行性耳下腺炎は29%増の244例、定点あたり1.2で、北河内2.2、大阪市北部2.1である。

インフルエンザは第52週が13%増の1,735例、第1週が37%増の2,385例で定点あたり7.8となった。全ブロックで増加し、大阪市西部24.7、大阪市北部11.9と2ブロックで注意報レベル基準値10を超えている。今後の動向に注意が必要である。AH3亜型が分離されている。

麻しん、風しんの報告はなかった。

大阪府感染症発生動向調査事業実施要綱

（目的）

第1 大阪府は、感染症の発生に関する情報を迅速に収集・分析し、情報の提供・公開を行い、感染症に対する有効かつ的確な予防対策の確立に資するため、「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」（平成10年法律第114号）第3章の規定、及び、「法の施行に伴う感染症発生動向調査事業の実施について」（平成11年3月19日健医発第458号厚生省保健医療局長通知）における「感染症発生動向調査事業実施要綱」に基づき、感染症発生動向調査を実施する。本要綱は、その実施にあたり、必要な事項を定めたものである。

（対象感染症）

第2 本事業の対象とする感染症は、次のとおりとする。

1. 全数把握対象感染症

〔一類感染症〕

- (1) エボラ出血熱 (2) クリミア・コンゴ出血熱 (3) 痘そう (4) 南米出血熱 (5) ペスト
(6) マールブルグ病 (7) ラッサ熱

〔二類感染症〕

- (8) 急性灰白髄炎 (9) 結核 (10) ジフテリア (11) 重症急性呼吸器症候群（病原体がベータコロナウイルス属SARSコロナウイルスであるものに限る） (12) 中東呼吸器症候群（病原体がベータコロナウイルス属MERSコロナウイルスであるものに限る） (13) 鳥インフルエンザ（H5N1） (14) 鳥インフルエンザ（H7N9）

〔三類感染症〕

- (15) コレラ (16) 細菌性赤痢 (17) 腸管出血性大腸菌感染症 (18) 腸チフス (19) パラチフス

〔四類感染症〕

- (20) E型肝炎 (21) ウエストナイル熱（ウエストナイル脳炎を含む） (22) A型肝炎
(23) エキノコックス症 (24) 黄熱 (25) オウム病 (26) オムスク出血熱 (27) 回帰熱
(28) キャサヌル森林病 (29) Q熱 (30) 狂犬病 (31) コクシジオイデス症 (32) サル痘
(33) ジカウイルス感染症 (34) 重症熱性血小板減少症候群（病原体がフレボウイルス属SFTSウイルスであるものに限る） (35) 腎症候性出血熱 (36) 西部ウマ脳炎 (37) ダニ媒介脳炎
(38) 炭疽 (39) チクングニア熱 (40) つつが虫病 (41) デング熱 (42) 東部ウマ脳炎
(43) 鳥インフルエンザ（H5N1及びH7N9を除く） (44) ニパウイルス感染症 (45) 日本紅斑熱
(46) 日本脳炎 (47) ハンタウイルス肺症候群 (48) Bウイルス病 (49) 鼻疽
(50) ブルセラ症 (51) ベネズエラウマ脳炎 (52) ヘンドラウイルス感染症
(53) 発しんチフス (54) ボツリヌス症 (55) マラリア (56) 野兎病 (57) ライム病
(58) リッサウイルス感染症 (59) リフトバレー熱 (60) 類鼻疽 (61) レジオネラ症
(62) レプトスピラ症 (63) ロッキー山紅斑熱

〔五類感染症（全数）〕

- (64) アメーバ赤痢 (65) ウイルス性肝炎 (E型肝炎及びA型肝炎を除く) (66) カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症 (67) 急性脳炎 (ウエストナイル脳炎、西部ウマ脳炎、ダニ媒介脳炎、東部ウマ脳炎、日本脳炎、ベネズエラウマ脳炎及びリフトバレー熱を除く) (68) クリプトスポリジウム症 (69) クロイツフェルト・ヤコブ病 (70) 劇症型溶血性レンサ球菌感染症
(71) 後天性免疫不全症候群 (72) ジアルジア症 (73) 侵襲性インフルエンザ菌感染症
(74) 侵襲性髄膜炎菌感染症 (75) 侵襲性肺炎球菌感染症 (76) 水痘 (患者が入院を要すると認められるものに限る) (77) 先天性風しん症候群 (78) 梅毒 (79) 播種性クリプトコックス症 (80) 破傷風 (81) バンコマイシン耐性黄色ブドウ球菌感染症 (82) バンコマイシン耐性腸球菌感染症 (83) 風しん (84) 麻しん (85) 薬剤耐性アシネトバクター感染症

[新型インフルエンザ等感染症]

- (111) 新型インフルエンザ (112) 再興型インフルエンザ

[指定感染症]

該当なし

2. 定点把握対象感染症

[五類感染症 (定点)]

- (86) R S ウイルス感染症 (87) 咽頭結膜熱 (88) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎
(89) 感染性胃腸炎 (90) 水痘 (91) 手足口病 (92) 伝染性紅斑 (93) 突発性発しん
(94) 百日咳 (95) ヘルパンギーナ (96) 流行性耳下腺炎
(97) インフルエンザ (鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く)
(98) 急性出血性結膜炎 (99) 流行性角結膜炎 (100) 性器クラミジア感染症
(101) 性器ヘルペスウイルス感染症 (102) 尖圭コンジローマ (103) 淋菌感染症
(104) クラミジア肺炎 (オウム病を除く) (105) 細菌性髄膜炎 (髄膜炎菌、肺炎球菌、インフルエンザ菌を原因として同定された場合を除く) (106) ペニシリン耐性肺炎球菌感染症
(107) マイコプラズマ肺炎 (108) 無菌性髄膜炎 (109) メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症
(110) 薬剤耐性緑膿菌感染症

[法第14条第1項に規定する厚生労働省令で定める疑似症]

- (113) 摂氏38度以上の発熱及び呼吸器症状 (明らかな外傷又は器質的疾患に起因するものを除く)
(114) 発熱及び発しん又は水疱 (ただし、当該疑似症が二類感染症、三類感染症、四類感染症、五類感染症の患者の症状であることが明らかな場合を除く)

3. オンラインシステムによる積極的疫学調査結果の報告の対象

[二類感染症]

- (13) 鳥インフルエンザ (H 5 N 1)

(実施主体)

第3 本事業の実施主体は大阪府とし、次項に定める組織をもって対応するものとする。

（組織）

第4 情報処理の総合的かつ円滑な推進を図るため、次の体制により実施する。

（1）大阪府感染症情報センター

次の事項を実施するため、府立公衆衛生研究所に大阪府感染症情報センターを置く。

- ①中央感染症情報センター（国立感染症研究所感染症疫学センター）との連絡調整
- ②所管地域における患者発生情報、疑似症の発生情報及び検査情報の収集・分析
- ③全国情報及び収集した情報の、医師会及び保健所等関係機関への還元

（2）検査実施機関

本事業における検査実施機関は、府立公衆衛生研究所とする。検査実施機関は、検査施設における病原体等検査の業務管理要領に基づき検査を実施し、検査の信頼性確保に努めることとする。

（3）指定届出機関及び指定提出機関（定点）

定点把握の対象疾病について、患者発生情報、疑似症の発生情報及び病原体の分離等の検査情報を収集するため、患者定点、疑似症定点及び病原体定点を（一社）大阪府医師会等関係機関の協力のもとにそれぞれ大阪府内の医療機関の中から選定する。

① 患者定点

対象疾病の患者発生状況を地域的に把握するため、人口及び医療機関の分布等を勘案の上、厚生労働省の示す基準に準拠し、概ね次のとおり設置するものとする。

小児科定点	85カ所
インフルエンザ定点（小児科定点と内科定点）	138カ所
眼科定点	20カ所
性感染症定点	28カ所
基幹定点	9カ所

② 病原体定点

病原体の分離等検査情報を収集するため、次の点に留意して医療機関の中から選定する。原則として、患者定点として選定された医療機関の中から選定する。

小児科定点、インフルエンザ定点、眼科定点の概ね10%を目安として選定したもの及びすべての基幹定点を病原体定点とする。

なお、インフルエンザ病原体定点（指定提出機関）の選定にあたっては、小児科定点及び内科定点それぞれから、10%以上を、目安として選定する。

③ 疑似症定点

疑似症の発生状況を地域的に把握するため、人口及び医療機関の分布等を勘案の上、厚生労働省の示す基準に準拠し概ね次により設置するものとする。

第一号疑似症定点（小児科又は内科を標榜する医療機関）及び第二号疑似症定点（小児科、内科又は皮膚科を標榜する医療機関） 合わせて 209カ所

（4）大阪府感染症発生動向調査委員会

感染症に関する情報についての分析並びに感染症の発生の状況、動向及び原因に関する情報並びに当該感染症の予防及び治療に必要な情報の公表についての調査審議を行うため、「大阪府感染症発生動向調査委員会」を設置する。

(5) 大阪府感染症情報解析評価委員会

感染症の発生状況、動向及び病原体情報等を解析し、感染症の予防及びまん延の防止に資するため、専門家の意見を聴取及び意見交換を行うことを目的とし、「大阪府感染症情報解析評価委員会」を設置する。

(事業の実施)

第5 本事業の実施にあたっては、本庁（健康医療部保健医療室医療対策課）、大阪府感染症情報センター（府立公衆衛生研究所）及び府保健所にコンピューターを設置し構築した、オンラインシステムによるものとする。

(1) 調査単位及び実施方法

① 一類感染症、二類感染症、三類感染症、四類感染症、五類感染症（第2の(74)及び(84)）、新型インフルエンザ等感染症及び指定感染症の患者等を診断した医師は、直ちに最寄りの保健所に該当する感染症の届出様式により患者等の情報の届出を行う。

全数把握対象の五類感染症（第2の(74)及び(84)を除く）の患者等を診断した医師は、患者情報を診断後7日以内に最寄りの保健所に該当する感染症の届出様式により患者等の情報の届出を行う。

さらに必要に応じて、検体を確保し、保健所の求めに応じ、患者情報と共に提供する。

患者情報のうち、小児科定点（対象疾病(86)～(96)）、インフルエンザ定点(97)、眼科定点(98)及び(99)、基幹定点（第2の対象疾病(89)、(97)、(104)、(105)、(107)及び(108)）の患者情報については一週間（月曜日から日曜日まで）を調査単位とし、保健所に報告をする。なお、基幹定点における(89)の届出基準は小児科定点と異なり病原体がロタウイルスであるものに限ること、(97)の届出基準はインフルエンザ定点と異なり入院患者に限定されることに留意すること。

性感染症定点及び、基幹定点（第2の対象疾病(106)、(109)及び(110)）の患者情報については1カ月を調査単位とし、保健所に報告をする。

② 病原体検査情報については、原則として1カ月を調査単位とするが、(97)については、定点あたり報告数が1を超える時期には、1週間を調査単位とする。

③ 結核については、①に定めるところとは別に情報の収集を図るものとするが、その結果は、新登録者に関しては月報、登録除外者に関しては年報、登録者の全体に関しては年末現在につき年報として取りまとめるものとする。

(2) 患者定点となる医療機関

患者定点として選定された医療機関は、速やかな情報提供を図る趣旨から、調査単位の期間の診療時における主として臨床診断の結果をもって、患者発生状況の把握を行うものとする。

小児科定点、インフルエンザ定点、眼科定点、性感染症定点及び基幹定点においては、該当する定点の届出様式によりそれぞれ調査単位の患者発生状況等を報告する。

(3) 病原体定点となる医療機関

病原体定点として選定または指定された医療機関は、別に定める感染症発生動向調査事業病原体検査指針（感染症発生動向調査 病原体サーベイランスについて）により、検体を採取し、別記様式の検査票を添えて検査機関（公衆衛生研究所）へ送付する。

(4) 疑似症定点

疑似症定点として選定された医療機関は、速やかな情報提供を図る趣旨から、診療時における別に定める報告基準により、直ちに疑似症発生状況の把握を行うものとする。

疑似症定点においては、原則として症候群サーベイランスシステムへの入力により、疑似症の発生状況等を報告する。ただし、症候群サーベイランスシステムへの入力を実施することができない場合、疑似症定点届出様式により疑似症の発生状況等を報告する。

(5) 保健所

- ① 管内の医療機関から届出のあった患者情報を、遅滞なくオンラインシステムにより大阪府感染症情報センターに報告する。
- ② 一類感染症、二類感染症、三類感染症、四類感染症、新型インフルエンザ等感染症、指定感染症及び五類感染症（全数）の当該患者を診断した医師から届出があった場合など、感染症の発生を予防し、又は感染症の発生の状況、動向及び原因を明らかにするため必要があると認める場合には、病原体の検査を府立公衆衛生研究所に依頼する。府立公衆衛生研究所で実施することが困難なものについては、必要に応じて、本庁を通じて国立感染症研究所に検査を依頼する。
- ③ 医療機関等に検体等の提供を依頼し、その求めに応じない場合は勧告することが出来る。検体採取に際しては、患者に説明し、その同意を得ることが望ましい。
- ④ 鳥インフルエンザ（H5N1）に係る積極的疫学調査を実施した場合は、直ちに疑い症例調査支援システムに調査内容を入力し、大阪府感染症情報センターに報告する。

(6) 府立公衆衛生研究所

- ① 感染症のまん延を防止するため、保健所より依頼のあった病原体の検体を検査し、その結果を保健所を経由して、診断した医師に通知する。検査のうち、府立公衆衛生研究所で実施することが困難なものについては、必要に応じて国立感染症研究所に検査を依頼する。
- ② (3) より搬送された検体を検査し、その結果を本庁を経由して病原体定点に通知する。

(7) 大阪府感染症情報センター

- ① 管内の患者定点及び保健所から得られた患者情報を収集し、感染症については別途定める日までにオンラインシステムにより中央感染症情報センターへ報告する。
- ② 管内の患者定点から得られた患者情報の集計や検査情報を大阪府感染症情報解析評価委員会において解析評価し、その評価結果を速やかに週報として、また、性感染症の患者情報の集計及び解析結果については、月報として定点医療機関、保健所、医師会及び市町村等の関係機関へ還元する。
- ③ 前項の①及び②により検査された検査情報、管内病原体定点で採取の検査情報を本庁へ適宜報告するとともに、オンラインシステムにより中央感染症情報センターに報告する。
- ④ 鳥インフルエンザ（H5N1）に係る積極的疫学調査について、検体が送付された場合にあっては、当該検体を検査し、その内容を直ちに疑い症例支援システムに入力し、保健所に通知する。鳥インフルエンザ（H5N1）に係る積極的疫学調査の結果を厚生労働省に報告する場合にあっては、検体を国立感染症研究所に送付する。

⑤ 上記各号のほか、前項(4)(5)に掲げる会議の準備・運営に係る次の事項を担当する。

(イ) 開催にかかる連絡調整

(ロ) 会場及び会議用機材の準備、会議資料の制作

(ハ) 記録の調整

(ニ) その他会議の運営に関すること

(8) 本庁

管内の患者情報について、保健所からの情報の入力があり次第、登録情報の確認を行う。

第6 その他

本実施要綱に定める事項以外の内容については、必要に応じて健康医療部長が定めることとする。

附則

(施行期日)

1. この実施要綱は、昭和62年1月1日から実施する。

(要綱の廃止)

1. 大阪府感染症サーベイランス事業実施要綱は廃止する。

附則 <<略>>

附則

この実施要綱の一部改正は、平成27年5月21日から施行する。

この実施要綱の一部改正は、平成28年2月15日から施行する。

この実施要綱の一部改正は、平成28年4月1日から施行する。

大阪府感染症発生動向調査委員会設置要綱

（趣旨）

第一条 この要綱は、大阪府感染症発生動向調査委員会（以下「委員会」という。）の組織、委員の報酬及び費用弁償の額その他委員会に関し必要な事項を定めるものとする。

（職務）

第二条 委員会は、感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律（平成十年法律第百十四号）第十二条から第十五条の三までの規定により収集した感染症に関する情報についての分析、感染症の発生の状況、動向及び原因に関する情報並びに当該感染症の予防及び治療に必要な情報の公表について、報告・検討、意見交換を行うものとする。

（組織）

第三条 委員会は、委員二十人以内で組織する。

2 委員は、次に掲げる者のうちから、保健医療室長（以下「室長」という。）が任命する。

- 一 学識経験のある者
- 二 医療関係団体、医療施設等の代表者
- 三 関係行政機関の職員
- 四 前三号に掲げる者のほか、室長が適当と認める者

3 委員（関係行政機関の職員のうちから任命された委員を除く。）の任期は、三年とする。ただし、再任は妨げない。また、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

（会長）

第四条 委員会に会長を置き、委員の互選によってこれを定める。

- 2 会長は、会務を総理する。
- 3 会長に事故があるとき又は会長が欠けたときは、会長があらかじめ指名する委員が、その職務を代理する。

（会議）

第五条 委員会の会議は大阪府が招集し、会長がその議長となる。

（報酬）

第六条 委員の報酬の額は、附属機関委員等の報酬の額に準じ支払うものとする。

（費用弁償）

第七条 委員の費用弁償の額は、職員の旅費に関する条例（昭和四十年大阪府条例第三十七号）による指定職等の職務にある者以外の者の額相当額とする。

（庶務）

第八条 委員会の庶務は、健康医療部において行う。

（感染症情報解析評価委員会）

第九条 第二条の感染症の発生状況、動向及び病原体等の情報解析に関し、意見聴取及び意見交換を行うため、感染症情報解析評価委員会（以下「解析評価委員会」という。）を置く。

- 2 解析評価委員会は、委員十人以内で組織する。
- 3 前項の委員の任命は第三条第二項、任期は同条第三項を準用する。

- 4 解析評価委員会には委員長を置き、第二項の委員の互選によりこれを定める。
- 5 委員長は、解析評価委員会の議事を進行する。
- 6 委員長に事故があるとき又は委員長が欠けたときは、第四条第三項を準用する。
- 7 第二項の委員の報酬は第六条、費用弁償は第七条を準用する。
- 8 解析評価委員会は、必要に応じ、委員以外の者から意見を聴くことができる。
- 9 解析評価委員会は原則、毎週1回、開催するものとし、その庶務は大阪府感染症情報センターにおいて行う。

(委任)

第十条 この要綱に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、会長が定める。

附 則

この要綱は、公布の日から施行する。

附 則

この要綱は平成28年6月15日から施行する。

大阪府感染症発生動向調査委員会名簿

平成29年3月31日現在

委員名	所 属
大原 俊剛	大阪府保健所長会
大平 真司	大阪府医師会
亀岡 博	大阪泌尿器科臨床医会
河合 修三	大阪皮膚科医会
木下 優	大阪府健康医療部
澤田 益臣	大阪産婦人科医会
塩見 正司	大阪府医師会
勢戸 和子	大阪府立公衆衛生研究所
◎ 東野 博彦	大阪府医師会
松本 淳	大阪府医師会
宮浦 徹	大阪府眼科医会
三宅 眞実	大阪府立大学大学院
本村 和嗣	大阪府立公衆衛生研究所
八木 由奈	大阪小児科医会
安井 良則	大阪府済生会中津病院
弓指 孝博	大阪府立公衆衛生研究所
吉田 英樹	大阪市保健所

◎ 会長